

筑波大学附属視覚特別支援学校における美術教育

1. はじめに

美術は一般に、視覚を前提として成立する芸術分野と考えられています。このため視覚特別支援学校で美術の授業を進める上では、「いかに見えない・見えにくい子どもたちに視覚芸術である美術教育を展開していくか」というテーマが生じています。

今日、日本の視覚特別支援学校における美術教育は、学習指導要領・教科書にもとづいて、障害の状態や特性を考慮しながら指導内容・題材の設定を行っています。指導にあたっては、子どもたちの保有する感覚（触覚・聴覚・嗅覚・皮膚感覚・弱視の場合は視覚も含みます）を最大限にいかした活動を保障することが前提となります。その上で、子どもたちが素材や用具に能動的に働きかけ造形表現の基礎となる力・造形感覚を育てていくこと、表現活動や鑑賞活動を通してイメージする力・創造性を養うこと、表現の多様性に気づき、よさを認め自己の表現にいかすことに焦点をあてた指導を展開しています。

では、具体的な取組について小学部の実践をもとに以下にご紹介します。

2. 実践報告

①小学部3年：木工具との出会い『雨の音？波の音？』

まず、木工作の導入学習として小学部3年生が取り組む『雨の音？波の音？』（写真1）についてご紹介します。

これは、長さ1mほどの厚手の紙筒の周囲に100本を超える鋸を木づちで打ち込み、筒の内部に米・小豆・大豆等の素材から好みのものを適量入れ、筒の両端をふさいでできた楽器です。筒をそっと傾けると、内側に埋め込んだ無数の鋸に細かな素材があたり、寄せては返す波の音や静かに降りしきる小雨の音を思わせる心地よい音色を響かせます。

制作時は、紙筒が動かないよう作業台に固定し、上敷き鋸（頭部直径13mm、胴部長さ38mm）を木づちでトントン打ち込んでいきます。上敷き鋸は、釘に比べて胴部が長く持ちやすいこと、頭部が大きくプラスチック製で木づちで叩きやすいことから釘打ちの導入段階に有効です。活動当初、鋸を握る手指の位置を確かめながら慎重に木づちを振り下ろし、こわごわ鋸を叩いていた子どもたちも次第に感覚をつかみ、教師の支援を必要とせず瞬く間に目標数の鋸を打ち終えるまで成長します。

紙筒の固定には万力という工具を使用します。全盲児童は触察を通して万力の構造や操作方法を学び、自分で作業台の角にセ



写真1 『雨の音？波の音？』
児童作品

ットし紙筒を固定して両手が自由になる状態で鋸打ち作業を進めていきます。作品は、木づちで打ち込んだ鋸の数が多ければ多いほど美しい音色になるため、子どもたちは一生懸命取り組みます。このことから『雨の音？波の音？』づくりは、作業と音が結び付いた視覚に障害のある子どもたちにとって分かりやすく達成感が得やすい作品といえます。

②小学部4年：大好きだった玩具クーゲルバーンを紙工作でつくるー『ビー玉コロリンチン』
続いて小学部4年生が制作する『ビー玉コロリンチン』（写真2）をご紹介します。

この題材は、ビー玉がコロコロと転がり坂道を下ってベルをチンと鳴らす、幼児期に遊んだ玩具クーゲルバーンを想起させる、子どもたちにとって興味・関心が高く人気のある紙工作の学習です。しかし、平らな紙から3次元空間をつくるプロセスは、視覚に障害のある子どもたちにとって難しさがともないます。そのため、教師が作品の構造や転がる仕組みを整理し、よりシンプルに分かりやすく題材を提示することによって、触察を通した認知とつくりやすさを支えます。さらに、ビー玉の代用に音の出る鈴・ゴールに置く自転車ベルの導入で、子どもたちの保有する感覚にうったえ、より好奇心や制作意欲をかきたてていきます。

制作にあたっては、身近にある工作用具を使用します。折り目をガイドにしながらはさみで紙を切り落とす、触覚的に識別しやすいフェルトシールを手がかりにホチキス留めをする、触察で認知可能なラインテープ上に両面テープを接着するといった工夫により、全盲児童の触覚にもとづく作業をより確実なものにします。

制作の第2段階では、ルールに飾りをつけたり、玉の転がり方に変化をつけたりするための作業に入ります。子どもたちがそれぞれの作品をバージョンアップさせようと、フェルトボールや片段ボール・シール・モール・人工芝風の紙等、思い思いのテクスチュアの素材を吟味して、ルールの上やその周りに貼り付けていきます。

授業の中で作品鑑賞の時間を設けますが、子どもたちは制作を共にしている仲間の作品を味わいながら、「すごーい。これ、いいね。どうやったの？」と賞賛の言葉を発し、他者の表現を自身の制作に取り入れようとする姿が見られます。視覚に障害のある子どもたちの場合、周囲の状況や作品の状態を的確に把握することが困難なため、教師が意図的に鑑賞時間を設け、友だちの作品をじっくり触察でき、間近で味わうことができる環境を整えることが大切になります。なぜなら作品鑑賞は、子どもたちが表現の多様性に気づき、新たな価値観を見い出しことのできる絶好の機会となるからです。



写真2 『ビー玉コロリンチン』児童作品

③小学部6年：大学芸術組織と視覚特別支援学校との連携ー『つくばアートメダルプロジェクト』
最後に、筑波大学芸術系彫塑領域と筑波大学附属視覚特別支援学校（以下、本校）とのアートメダルをテーマにした連携プロジェクトについてお伝えします。



写真3 ゲストティーチャーとの特別授業

本学に芸術組織を持つ日本でただ一つの大学附属視覚特別支援学校という本校の利点をいかし、大学との連携事業『TAMP つくばアートメダルプロジェクト』が立ち上がりました。このプロジェクトは、大学芸術系と附属学校との協働で、大学教員や大学で彫刻を学ぶ学生が、それぞれの専門性をいかして児童・生徒のアートメダルづくりを支援していくこと、完成したメダルを展覧会という場を設けて披露していくことを目指しました。

本校での活動は、小学部6年生8名・中学部3年生12名を対象として、大学の先生方や学生が加わった特別授業を設定しました。専門性の高いゲストティーチャーが、一人ひとりの自由な発想や思いを汲み取りながら、視覚に障害のある子どもたちの作品づくりをサポートしてくれました(写真3)。最後は作品をブロンズで鋳造していただき、本格的なアートメダルが完成しました。作品は日本国内の様々な会場に展示し、触れる展覧会を開催しています(写真4)。

アートメダル制作という共通のテーマで結ばれた視覚に障害のある子どもたち・大学教員・大学生。大学と同大学附属学校というつながりから生まれた専門性の高い方々との交流の意義はさることながら、自分たちのつくった作品に触れる展覧会という形で展示することは、これまで受け手(触わっていいとされる作品に触らせてもらう立場)だった子どもたちが、作り手として触れる作品を社会に発信する、という点において大変意義のある取組と考えています。



写真4 “触れる”アートメダルGINZA 2021

3. おわりに

視覚に障害のある児童生徒に対する美術教育は、子どもたちの保有する感覚をいかした素材・用具・題材・教材等の提示と視覚障害に配慮した適切な指導によって、児童一人ひとりのいきいきとした造形活動を支え、個々の感性や創造性を育むことを可能にします。

子どもたちがつくった作品は、同じテーマ・同じ空間・同じ環境で制作しているにもかかわらず、一つとして同じものは生まれません。手触り・形・色・音・・・子どもたちが夢中になって取り組んだ証が素材を通して具現化され、一つひとつ味わいのある作品として見る者にうったえかけています。

文責 筑波大学附属視覚特別支援学校 佐藤直子